

2. 研究の詳細

プロジェクト名	T. S. エリオットの「東洋哲学ノート」と彼の中道的思考の形成との関わり		
プロジェクト期間	平成24年度～平成25年度		
申請代表者 (所属講座等)	古賀元章 (英語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし

(1) 研究の目的

イギリスの詩人・劇作家・批評家で1948年にノーベル文学賞を受賞したT. S. エリオット (1888-1965) は、「東洋哲学ノート」と題する手稿を書き残している (ハーバード大学ホートン図書館に所蔵)。平成24年度に、弘前大学非常勤講師・翻訳家のA. C. アップル・マッシュューズ先生の協力により、「東洋哲学ノート」を可能な限り解読した。平成25年度に、翻訳会社「プログレス・インターナショナル」(福岡市)の協力により、この手稿の解読を可能な限り見直した。

解読とその見直しの結果、1913-14年の「東洋哲学ノート」に記述された内容の特徴 (インド、中国、日本における大乘仏教の宗派の教学) を考察し、この手稿が当時のエリオットの中道的思考 (極端に走らず、妥当な立場による考え) の形成に深く影響を及ぼしていることを研究した。

(2) 研究の内容

1913-14年におけるT. S. エリオットの中道的思考は、イギリスのF. H. ブラッドリー (1846-1924)の哲学思想 (認識者と対象との相関関係) の影響を受けている。エリオットの中道的思考はまた、彼が子供時代に過ごした生誕地のセントルイスの地理的位置 (都市の終着点であると同時に辺境地の出発点)、彼の懐疑的で相対主義的な性格の影響も受けている。エリオットの「東洋哲学ノート」に書かれているのは、中国の天台宗や日本の仏教各派の教学が大乘仏教中観派の祖であるナーガールジュナの中道思想 (縁起による空の实在) に依拠していることである。したがって、この手稿の内容とエリオットの中道的思考には、物事や事象の相関関係が共通点として認められる。この共通点に着目して、本プロジェクトを2年間にわたり実施した。

(3) 研究の方法・進め方

昨年度の研究成果を踏まえて、平成25年度の研究の方法・進め方は次の通りであった。

- ①中村元他編『岩波仏教辞典 第二版』(岩波書店、2002年)を参考にして、「東洋哲学ノート」に記載されている専門用語 (仏教、サンスクリット語、パーリ語) の意味を調べた。
- ②「プログレス・インターナショナル」のスタッフ (T. S. エリオットに関心を抱く外国人) の協力により、昨年度に行った「東洋哲学ノート」の解読を可能な限り見直した。それは、この手稿に記述された内容をより正確に把握するためであった。
- ③この手稿の内容とエリオットの中道的思考の共通点を手がかりにして、本プロジェクトの研究成果を二つの論文で公表した。

(4) 実施体制

平成24年度は次の通りであった。

- ①T. S. エリオットの「東洋哲学ノート」の可能な解読を、弘前大学非常勤講師・翻訳家のマッシュューズ先生 (青森県弘前市に在住) にしていただいた (平成24年12月)
- ②解読された手稿の内容の特徴について、マッシュューズ先生と弘前市で話し合った (平成25年2月16、17日)。

平成25年度は次の通りであった。

- ①「東洋哲学ノート」の内容をより正確に把握するため、この手稿の解読を見直した。
- ②時間の有効利用と地理的な利便性を考えて、福岡市にある「プログレス・インターナショナル」のスタッフ (T. S. エリオットに関心を抱く外国人) にこの見直しの協力を依頼した。

(5) 実施計画に対する進捗状況

「プロGRESS・インターナショナル」の外国人のスタッフがT. S. エリオットの「東洋哲学ノート」の解説を見直し、その大半は平成26年3月5日に終わった。この翻訳会社で、手稿の見直し作業に関して日本人のスタッフと話し合った（平成26年3月10日）。現在、この手稿に書かれた専門用語（仏教、サンスクリット語、パーリ語）を解説する注を執筆中である。

(6) 平成25年度実施による研究成果

①1910-14年のT. S. エリオットの人生に及ぼした「東洋哲学ノート」の影響について研究した。その概要は次の通りである。

1910-14年のエリオットは、自分自身が望む生き方を模索する行動を二度起こしている。それは、厳格な家庭教育を行う両親（特に母親）の庇護から解放されるためである。

一度目の行動は1910-11年にパリへ遊学したことである。しかし、エリオットは上述した望みが叶えられないでアメリカに帰国する。母国で彼の人生上の苦悩は続くことになる。その苦悩は、帰国後に脱稿された詩に反映される。

ハーバードでの勉強が彼の人生に転機をもたらす。それは、1914年に在外研究奨学金を獲得して、心酔していたF. H. ブラッドリーの哲学をイギリスで研究することである。この研究分野は、両親が反対していない領域である。二度目の行動を学問的に支援したのが、三人の人物—古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトス（前540頃-470頃）、イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒューム（1711-76）、アメリカの心理学者・哲学者ウィリアム・ジェームズ（1842-1910）—である。その支援を後押ししたのは、1913-14年に姉崎正治がハーバードで行った講義である。エリオットがこの講義に出席して注目した内容（人生の苦しみの受け止め方、現実を重視した行動）は、彼が1910年以来苦しんでいた人生の対処の仕方参考になっている。その点で、エリオットが書き残した「東洋哲学ノート」は、当時の彼の心境を考察するための貴重な資料である。

②T. S. エリオットは、1940-51年に発表した評論や著書の中で、求めるべき教育のあり方を積極的に提言する。そこで、この時期における彼の教育論の特徴を研究した。その概要は次の通りである。

エリオットは、教育を他の分野（文化、政治）と関連付けて考える。教育と他の分野は、相互に依存して発展すると見なされている。そこでは、対象間の相関関係が認識される。この認識は、認識者の〈今・ここ〉を出発点とする。こうした考え方を抱く彼は、学生時代に学んだF. H. ブラッドリーの相対主義的な哲学と姉崎正治の講義（ナーガールジュナの大乗仏教）の影響を受けている。

教育に関して、エリオットは三つの教育の目的（㊦職業のための教育の目的、㊧社会のための教育の目的、㊨個人のための教育の目的）を考察する。彼は、教育が〈今・ここ〉で対象間の相関関係に基づいて発展するため、統一性（㊦、㊧、㊨）が一体になった状態と多様性（㊦、㊧、㊨）のそれぞれが相互に依存した状態を併存することを主張する。この併存の考え方にも、ブラッドリーの相対主義的な哲学と姉崎の講義（天台宗のブツ観）の影響が認められる。

加えて、エリオットによれば、教育は、統一性と多様性を併存しながら発展するため、宗教と密接なかわりがある。そこで、宗教も統一性と多様性を併存することが求められる。統一性は、五者（教育者、宗教の教師、国家、教会、国民）が調和ある秩序を保つことである。多様性は、五者のそれぞれが相互に依存した関係を保つことである。エリオットが信仰する英国国教会の中庸の精神は、宗教のあり方ばかりではなく、宗教と教育との密接な結びつきにも反映されている。この中庸の精神は、彼が提唱する有機的な教育論の土台であると言える。

(7) 今後予想される成果

T. S. エリオットについての国内外の研究書や論文は、「東洋哲学ノート」の一部を紹介するだけである。姉崎正治についての研究書や論文は、この手稿への言及が皆無である。そこで、本プロジェクトによる研究成果は次の2点の意義が考えられる。

- ①国内外のエリオットの研究を推進させることが予想される。
- ②仏教や姉崎正治に関心を示す国内外の人々にも貴重な資料となる。

(8) 研究の今後の展望

平成26年度科学研究費助成事業の挑戦的萌芽研究（研究課題名：T. S. エリオットの「東洋哲学ノート」の研究）に採択された。そこで、本プロジェクトの研究成果を踏まえて、「東洋哲学ノート」の研究を行う予定である。その目的は、エリオットの手稿の研究成果を国内外の人々に広く情報公開して、この挑戦的萌芽研究を国際的に価値あるものにするることである。

(9) 論文

- ① 「1910-14年のT. S. エリオットと「東洋哲学ノート」」(『比較文化研究』108号、日本比較文化学会、平成25年10月31日、25-41ページ)
- ② 「T. S. エリオットの教育論の特徴」(『福岡教育大学紀要』63号1分冊、平成26年2月10日、11-20ページ)